

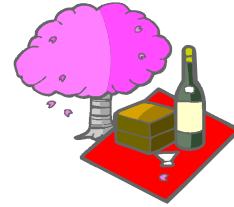
# 風の便り(第75号)

発行日：平成18年3月

発行者：「風の便り」編集委員会

拝啓

少子化担当国務大臣 猪口邦子 殿



## 1 答は「減税」でも「出産手当」でもなく、「養育の社会化」です

新聞報道で自民党が少子化対策の具体的な施策の検討を開始したと読みました。記事によると少子化対策に子どもを持つ家庭の「所得税の優遇」や「出産手当」をお考えのようですが、それは次の子どもを生んで見ようか、と若い両親を動かす答にはならないでしょう。問題の根源は短期の出費ではなく、長期の不安だからです。不安の原因はあらゆる要因を踏まえて、生まれてきた子どもが幸せに育ち、合わせて、自分たち親も幸せになれるか？という疑問です。前者は「子育て不安」後者は「女性の社会参画条件の不安」と呼んでいいでしょう。その答がはっきり出せないから不安なのです。育児ノイローゼのニュースを見てください。非行から引きこもりまで少年問題の多発を見てください。学校はしつけのできない家庭が悪いと攻め立てるだけで地域の問題に何一つ関わろうとはしない現状を見てください。しかも、家事と育児の大部分は女性の肩にかかっているのです。子どもが産めるのは女性だけです。当然、子どもを生むか、生まないかの決定権は女性にあります。それゆえ、第一の答は男性が女性と等しく育児にかかわれる男女共同参画社会の実現にあるのですが、

今、それを申し上げて「変わりたくない男」が大勢を占めている以上詮無いことでしょう。それゆえ、次善の策は、女性の子育て不安を社会政策によって社会が肩代わりすることです。それが「養育の社会化」です。「養育の社会化」が実現すれば、男女共同参画条件の半分は整ったと考えていいでしょう。

生まれてきた子どもは責任を持って社会が子育てのお手伝いをします、というメッセージを確実に女性に送ることが少子化防止の長期的な答です。そのためには行政も、学校も、地域もお手伝いします、というメッセージが不可欠なのです。子育ては産んだお前の責任でやれ。しつけも家庭の責任でやれ。家庭が「製造責任」を取るの当たり前と言わんばかりの年寄りのえらい男達のかぎり少子化は止まりません。また、家庭よ目覚めよ！女性の子育ての責任に目覚め、子育て中の母のネットワークを充実すればことは解決すると言わんばかりのえらい女達がいる限り少子化は止まりません。大臣殿、あなたの周りの審議会委員にはどんな方々がいるのでしょうか？

### \*\*\*\*\*目次\*\*\*\*\*

1. 拝啓 少子化担当国務大臣 猪口邦子 殿	P 1
2. A小学校への提案「一石数鳥」－「学力向上」と「子育て支援」の組み合わせ－	P 4
3. DOG YEARの生涯学習－「豊津モデル」「穂波モデル」の意味－	P 6
4. 「情緒的貧困化」－熟年期の社交と交流の創造－	P 8
5. 第65回生涯学習フォーラムレポート 評価の核心	P 14
6. Message to and From	P 15
7. 編集後記：予測不能か？準備不十分か？	P 16

## 2 「養育の社会化」とは子育ての肩代わりです

養育の社会化とは家庭に代わって社会が子育てのかなりの部分を引き受けるということです。文科省の中途半端な子どもの居場所づくりや福岡県のアンビシャス運動のような遊び場広場を作ってお茶を濁すような活動ではどうにもならないのです。「居場所」や「遊び場」を作れば子どもが集団を取り戻し、健全に成長するというのは現代の「迷信」であります。厚労省の学童保育（「放課後児童健全育成事業」）も子どもを少数の管理者によって狭い空間に閉じ込め、その安全だけを管理して、子どもの発達や成長を保証できるというのも「健全育成」の「偽装」であり、遊び場広場と同じく「迷信」です。安全管理だけを保障しても、教育上のプログラムを欠いた状況では保護者も不憫で次の子どもを預けるに忍びないことでしょう。それゆえ、養育の社会化の基本は「保教育」です。子どもの「保育」と「教育」は同時に実行されなければならず、実行のスケジュールは女性の社会参画の条件に

合わせて設定されなければなりません。

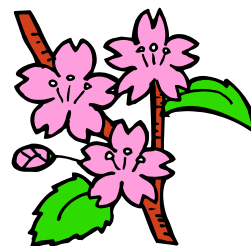
福岡県旧穂波町の「子ども学び塾」も、同県旧豊津町の「豊津寺子屋」の事業も行政と住民の協働によって、子育ての負担を社会がより多く分担し、養育の社会化を実現しようとしたところに最大の特徴があります。休暇中の「保教育」も、学期中のプログラムも働く女性の勤務スケジュールを基準にして設定しているのです。生活習慣の確立も社会生活の基本的価値の伝達も社会が提供するプログラムの中で行われるのです。二つの町はまだ学童期の子どものシステムの実験しか出来ていませんが、幼児期については更なる「養育の社会化」が必要になるでしょう。少子化防止のためのお金は一時の養育費の補助に当てず、「養育の社会化」のシステムづくりに廻してください。10分の1の金額で遥かに有効な対策になることを保障します。

## 3 「外部化」と「選択」は現代の必然です

「養育の社会化」の具体的な中身は乳幼児に於ては、「幼保一元化」の徹底と保育時間の延長と弾力化にあり、学童期に於ては放課後及び学校の休業中の「保教育」の実践にあります。子育ての原点は私事です。それぞれの家庭のプライバシーに属します。それゆえ、「親権」が認められてきたのでしょう。子育ては次代を育み、家族も、社会も存続を可能にする「崇高な営み」です。しかし、現状を見れば明らかなように、子育ては「崇高な営み」であると同時に「負担の多い営み」なのです。時間も、エネルギーも、気力も体力も、智恵も、知識も不可欠な営みです。説明の理屈は色々ありますが、とにかく家族も、子育てを実質的に担当している女性もこの「負担の多い営み」に対して社会の具体的な支援を必要としているのです。「負担」をそのままにしておいて次の子どもを産んでください、というのはすでに無理なのです。

人間の私生活における「外部化」の歴史を見てください。生産からサービスまで社会の分業が進み、レベルには色々違いがありますが、教育も、医療も、娯楽も、料理も、洗濯も、介護も、引越

し、保育の一部も社会が引き受けるようになりました。最後に残されたものが「養育」です。「養育」は保育と教育とその過程の困難や喜びによって構成されています。それゆえ、最後まで自分でやる、という保護者もいらっしやるでしょう。反対に社会にお願いします、という保護者もいらっしやるでしょう。そこは「選択」の問題です。「選択」を前提とする以上、サービスの恩恵を受ける方々の「受益者負担」は当然です。「養育の社会化」の施策は人々の選択が行えるように社会が提供するサービスの中身をはっきりさせることにあります。その概念が「保教育」だと思います。「外部化」と「選択」は現代の必然ではないでしょうか？



#### 4 子育て支援だけを単独でやらないでください。

大臣は子育て支援のご担当ですが、この問題だけを単独で取り上げないでください。子育て支援は男女共同参画に絡み、子どもの安全確保に絡み、学校施設の開放に絡み、やり方如何によっては高齢者の社会参加にかかわります。旧穂波町の実践には学校が正式に噛んでいます。旧豊津町の実践も学校施設が活動の拠点です。住民と行政の協働による実行委員会方式が採用され、

多くの高齢者ボランティアが子どもの指導に関わっています。理由は4つあります。第1は高齢者ご自身がお元気になること、第2はボランティアによって住民の活力が向上し、世代間の交流を促進することが出来ます。第3に学校施設の開放は子どもの活動に最適です。第4は何よりも専門家を招いて指導に当たる財源の余裕は自治体にはすでにないでしょう。

#### 5 まわりに総合的にももの考える人々はいないのでしょうか！？

子育て支援／少子化防止対策は典型的な複合課題です。それゆえ、専門にこだわった「たこつぼ」提案は役に立たないのです。総合的な子育て支援を行うためには、「児童福祉行政」、「高齢者健康行政」、「女性政策行政」、「教育行政」間の連携が不可欠なのです。小さな町がすでにその努力をしているのです。中央の「縦割り行政」を直ちに是正することが不可能であることは仕方がありませ

ん。しかし、「縦割り」の修正が無理でも、異分野間の協力をプロジェクト制で実施する努力は可能でしょう。国は地方自治体が手本にできる「プロジェクト・モデル」を提示してはいかがでしょうか？「教育」と「福祉」が連携するだけで事業の総合化はかなり進むのです。それが総合的問題を担当する大臣の最大のお役目と心得ますがいかがでしょうか。

### 中国・四国・九州地区生涯学習実践研究交流会第25回記念大会

日時：平成18年5月19日(金)～21日(日)

(19日金曜日は「前夜祭夜なべ談義」―「実行委員会」です。)

場所：福岡県立社会教育総合センター(福岡県篠栗町、TEL:092-471-3511)

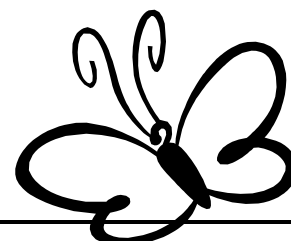
事例発表：5月20日(土)

コミュニティ・カフェ『夢ほっとプラザ』(岡山県)から「ジュニア生涯学習チャレンジ100単位プラン」(鹿児島県)まで34事例

特別企画：5月21日(日)9:00～11:20

内容 第一部「定年と老いをどう生きるか？」

第二部「残された『生涯時間20年時代』の生涯学習施策を問う」



# A 小学校への提案—「一石数鳥」

## — 「学力向上」と「子育て支援」の組み合わせ —

非公式ながら教育事務所を通して小学校の学力向上の取り組みを応援してもらいたい旨の相談があった。恐らく現在の学校は筆者の提案は飲まない。筆者の提案はこれまでの彼らの努力の全否定に繋がると受取られるからである。しかし、ダメで元々、いつかは分る時が来るであろう。

学校は結果を出せていない。結果が出ていない以上、事実は頑固である。戦後教育は子どもの指導法を間違えたのである。以下は筆者の想像—創造プランである。山口県のスローガンに倣って「一石数鳥」のプログラムである。生涯学習は Dog-Year のスピードで変わっている。分野によっては1年の変化が通常の変化の5年にも時には7年にも当る。生涯学習の Dog-Year は少子高齢化の行き詰まりによって到来した。提案は「学力向上」と「子育て支援」の組み合わせである。今や子どもの学力は家庭や地域の発達環境の充実抜きには達成できない。学校の学力向上の努力が子育て支援と結びつく必然性がそこにある。家庭の教育力も地域のそれもまさにどん底に近いからである。

### (1) 戦後教育の指導原理は間違いである \* \* \* \* \*

学校は努力を続けても結果は出ていない。それが方法論の誤りの何よりの証拠である。筆者には長崎県壱岐市霞翠小学校での3年間の「学力向上と「タフな子ども」を組み合わせた共同実践の経験がある。現状に於ては「過激」と言わざるを得ない筆者の提案を受け入れて、同小学校は先生方の抜群のチームワークと実践によって著しい効果を上げた。指導方法を根本から変えたからである。霞翠小の子どもは、学力も体力も表現力も小社会人としての礼節も、恐らくは人間としての基礎を見事に確立した。この過程は先生方によって記録され、分析され、多くの見学者によって確認されている。指導原理は「半人前の主体性」は半分しか認めないことであり、「型」の修得と体力と耐性の鍛錬に重点を置くことである。霞翠小の教師集団はこの提案を理解し、団結し、指導方法を一貫して守り通した。方法さえ誤らなければ、現状の教育条件の中で学力の向上は困難な課題では決してない。学力向上の解決要因は学力指導の外にある。まずは学力の基礎を成す体力と耐性の育成が先決である。次に親や教師や大人一般に対する礼節や総合的な EQ(感情値—人間関係能力)の育成である。

学力指導は学校の専門だが、学力以外は家庭や地域と共同で育てなければ育たない。事实现代の子どもは「へなへな」で社会生活の予行演習は極めて不十分である。したがって、礼節を知らず、体験は各種欠損し、欠損した分だけ発達はいつでかつ遅れている。本気で小学校が学力の回復／向上を目指すのであれば、家庭や地域と協働した総合的プログラムを実施するしかない。必然的に協働の総合プログラムは子育て支援を含み、家庭教育支援を含まざるを得ない。教育事務所は文科省の補助金を受けて家庭教育支援の看板の下に各種事業を行ってきた。しかし、成果は上がっていない。事業計画を支援する会議の会長は筆者が務めている。情けないことであるが、金をどぶに捨てるように事業に毎年無駄な金を使っている。学校を始め家庭も地域も子どもの指導法を間違っているのに通常のやり方で家庭教育を正すことなどできるはずはない。一般論として甘やかしの「抑止力」を失った「子宝の風土」の家庭に教育の基本が分る訳はない。家庭教育を正そうとすれば、現在の「へなへな」を「一人前」にしてみせるしか有効な説得力はない。教育事務所では担当の先生がかすかにこのことを理解してくれて A 小学校の

話が舞い込んだのであろう。

## (2) 教員のフレックスタイム制はとれるか！？ \* \* \* \* \*

A 小学校では学校主導型「学力向上-子育て・家庭教育支援」のプログラムを実施したい。悠長な方法では時間がないからである。筆者に時間がなく、社会に時間がない。学校が子育て支援、家庭教育支援まで視野に入れた学力指導をやろうとすれば、教員のフレックスタイム制が不可欠の条件である。なぜなら「補習」も「子育て支援」もともにやろうとすれば、通常の勤務時間をこえるからである。しかし、実行すれば、日本初の試みであり、「学力保障」の意味も、「加配」教員の意味も初めて明かになる。教育もまた他の分野と同じく「結果」が勝負だからである。

学校の最終目標は「学力の向上」である。しかし、そのためには学力の基礎となる「見えない学

力」を固めなければならない。「見えない学力」を構成するのが体力と耐性と体験の豊かさである。従って見えない学力は学校だけでは形成に時間とエネルギーがかかり過ぎる。家庭および地域との連携が不可欠である。学力向上運動が子育て支援・家庭教育支援の課題に繋がるのはそのためである。言葉を飾らずに言えば、すでに家庭に教育力はない。地域の教育力もない。頑張っている人々もいるが惜しむらくは指導方法が間違っているのではほとんどのプログラムにおいて効果は上がっていない。指導方法のモデルはすでに霞翠小で示し、「豊津寺子屋」で示している。問題は学校が学力向上と絡めて子育て支援まで踏み込むか！？である。

## (3) 学校が終わったら「寺子屋」になる \* \* \* \* \*

筆者は学校と「寺子屋」の機能を大雑把に区別している。学校は教科教育の専門機関で、寺子屋は社会生活の予行演習機関である。放課後と休暇中は学校が学校中心の子育て支援プログラムを実施し、地域の方々の加勢を得て教員がコーディネーターを務める。これが出来たら学力は必ず上がる。

学校が本気になれば教員のコーディネーターは最適である。なぜなら、子育て支援の活動拠点は学校施設である。学校が主導すれば文科省の外郭団体である「学校安全会」の保険の適用が受けられる。「子宝」の風土において学校は巧まずして住民の信頼を得ている。学校が嚙んだプログラムは保護者の信頼と安心感が増幅するのである。プログラムのモデルはすでに「穂波」や「豊津」にある。これらのモデルに従うとすれば、午後6時ま

での「保教育」が働く女性のための応援スケジュールである。”大抵6時までは誰かが残っているのですよ。”と教育事務所の先生はおっしゃる。だったら担任を持たないいわゆる「加配教員」を中心としてフレックスタイムの時差出勤を工夫すれば、放課後の学力補習授業ですら可能になる。地域の熟年指導者の加勢を加えれば「寺子屋」プログラムは鬼に金棒であろう。

学校が男女共同参画施策に協力した例はない。学校が子育て支援に協力した例も寡聞にして少ない。学校の時差出勤制も稀であろう。放課後や休暇中に学習進度の遅い子どもの補習をしてやれば、「加配教員」の意味が誰にでも分る。まして子育て支援まで協力すれば無駄だと思ふ人はいなくなるであろう。

## (4) 活動の中身は「補習・宿題サポート」と学校外プログラムである \* \* \* \* \*

「豊津モデル」のコーディネーターは住民と行政の協働による実行委員会方式である。「穂波モデ

ル」は公民館が仲介している。学校主導型は初めて教員がコーディネーターになる。方法はゲスト

ティーチャーをお迎えする時と変わりはない。住民の有志に放課後プログラムの加勢をお願いし、「指導者」は住民の中から登録していただくことになる。この時社会教育行政や公民館の協力を仰ぐことができれば、学社連携になる。公民館の張り切る顔が見えるようである。教員は学習の遅れた子どもの個別指導や小グループ指導を担当し、住民指

導者は教科外の遊びや体験や集団活動を担当する。6時まで預かれれば現行の学童保育は不要になる。学童保育の予算を当てれば運営は十分可能になる。プログラムが機能すれば、確実に学力向上に繋がる。この時学校はコミュニティスクールになるばかりではない。子どものための生涯学習センターになるのである。

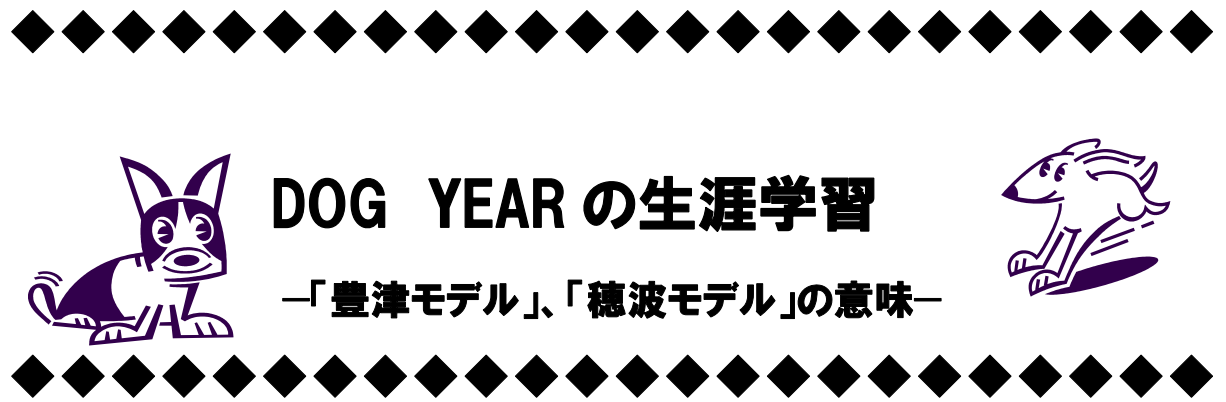
## (5) 子育て支援学校 \* \* \* \* \*

霞翠小学校は学力の向上にも体力・耐性の向上にも成功した。教員の努力と専門指導力の賜物であることは論を待たない。成功の結果が保護者や地域の学校評価を変えたことも言うまでもない。しかし、霞翠小の事例では「学力」は向上したが、「子育て支援」にはならない。従って少子化の防止にもならない。

長期的には霞翠小学校を支えるコミュニティからやがて子どもの声が消えて行くことは疑いない。少子化を防止できないことは学校の責任ではないが学校主導の総合的プログラムが実行できれば、少子化は止めることができる。「子宝の風土」の学

校がどれほど強大な力を有しているか！、それが子育て支援にどのくらい貢献し得るか！

やがて文科省も、厚労省も事業の意義に気付くであろう。学校は住民の尊敬を勝ち得て、かつての輝きを取り戻すであろう。学校主導の子育て支援は「穂波モデル」よりも、「豊津モデル」よりももっとも簡便で、有効な方法である。問題は学校の生涯学習化への意欲と教育システム・組織の弾力化が可能であるか、否かである。通常であればこのような提案は狂気の沙汰と笑われるであろう。しかし、現代はDog-Yearである。何が起るか予想はつかない。楽しみに事態の進展を待っている。



犬の最初の1年は人間の7年にあたり、そのあと5年ずつ年を取るといふ。そこから変化の早い領域の1年をDog Yearと呼ぶらしい。他の分野の1年がその分野では7年に当たるような変化が起るのである。情報化の進展やIT産業の分野はまさにこのDog Year的变化であろう。近年の生涯学習を取り巻く環境の変化もDog Yearのスピード

に近い。少子化問題も、少年問題の多発も、高齢化問題も、男女共同参画条件の不備も、学校教育の停滞も複数の分野のマイナス条件が一気に吹き出したのである。一つ一つの問題も深刻であるが、これらの問題が絡み合うと深刻さの度合いはそれぞれの問題を破綻させるほどにすさまじい。すでに何度か提案したように対策は総合的に打た

なければならない。福岡県京都郡豊津町の「豊津寺子屋」と同県穂波町の「穂波子ども学び塾」がこの三月文部科学大臣の感謝状を受けることになった。心からお祝申し上げる。推薦して下さった県の担当者の見識を讃えたい。しかし、表彰する文科省の側は本当に上記二つのモデルの意味を理解しているであろうか？子育て支援は、保護者の支援；特に働く女性の支援である。だからこそ働く女性のスケジュールと支援スケジュールを合致させているのである。指導は熟年が担当している。それゆえ、熟年のお元氣も支援している。学校施設を拠点とするので学校のコミュニティ・スクール化にも貢献している。「豊津モデル」は学童保育も組み込んでいる。

これまでの補助金の組み方を見ても、最終年の補助金の削減方法を見ても、文科省が子育て支援総合化の意味を理解しているとは思えず、学校を組み込むことの重要性を認識しているとは到底思えない。認識しているとすれば、文科省にとって学校に協力支援の「通達」1本を出すことぐらい簡単な筈なのである。「豊津」も、「穂波」も学校の関与と協力を得るまでにどれほどの時間とエネルギーと気を使ってきたか、補助金の担当者は想像もできまい。

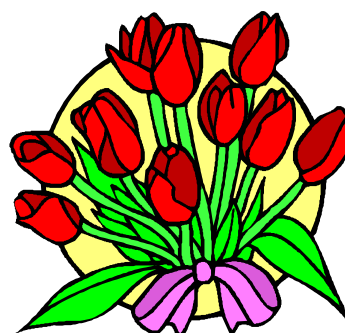
社会教育の直営事業にも、公民館のプログラムにも、すでに単発の学級講座はいらない。散発的な少年のプログラムもいらない。高齢者のエンターテインメントもいらない。必要なのは少年の発達も、高齢者も、働く女性も、学校の生涯学習化も、子どもの安全もすべてが絡み合った「複合問題」の対策の総合化である。そのためには学校が核である。学校が核に成りうるためには学校自身の覚醒に期待はできない。教育行政による学校の制度的、他律的生涯学習化が不可欠である。生涯学習行政の課題これに優るものはない。

文科省も、中央教育審議会も自分の守備範囲を限定して考えているので複合問題対策の総合化の視点に立つことができないのである。複合問題はその複合性の故に、これまで行政が自らの任務を分業化したように分野別、対象別のアプローチでは到底対応はできない。青少年教育担当が青少年問題だけやっても地域の問題は解決

できない。社会教育と義務教育を分業化していれば学校は決してコミュニティ・スクールにはならない。Dog Year の生涯学習課題に既存の分業システムは歯が立たないのである。行政は自己評価ができない。従って、自己否定もできない。政治の出番なのである。高速道路と同じように、郵政三事業と同じように、金融機関の不良債権処理と同じように生涯学習施策の抜本改革も政治の出番なのである。

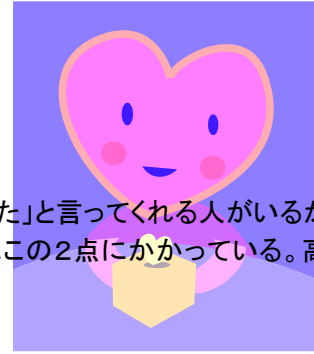
少子高齢化対策も、男女共同参画の条件整備も生涯学習の課題になったのである。しかし、公民館も社会教育も施策やプログラムの総合化は出来ていない。異部局間のプロジェクトチーム化も、予算投入の焦点化も出来ていない。政治が社会教育予算を切るのも、人員を削減するのも、従来の社会教育は Dog Year の課題に効果的に対応することがほとんど全くできていないからである。変わることをできない従来の社会教育は減ぶ。公民館がその水先案内を務めることになるであろう。次には生涯学習センターが減ぶであろう。(県によってはすでに廃止されている。)あらゆる社会教育施設ではサービスの「集中と選択」はできていない。従来の総花的プログラムでは少子高齢化の役には全く立たないことが分かっているからである。もちろん、政治が答を知っている訳ではない。それゆえ、問題の深刻化はますますその度合いを深めるであろう。

子どもの教育も、子育て支援も、日本中が混乱して犠牲者が限度を越えて増えた時初めて聞く耳をもつだろう。それまでは地道に自分の守備範囲を守って頑張るしかない。



# 「情緒的貧困化」

## —熟年期の社交と交流の創造—



「あなたがいてよかった」と思える人はいるか？「あなたがいてよかった」と言ってくれる人がいるか？前者は「心の支え」である。後者は「居甲斐」である。人生の活力はまさにこの2点にかかっている。高齢期の活力も当然この2点が支えている。

### 1 孤立と孤独の不可避性

高齢社会はみんなが長生きになる社会でも、長生きをした人々がすべてみんな幸せになれる社会でもありません。人々の寿命の平均値が伸びるということであり、長生きした結果の幸福は個人に保留されている社会を意味しています。高齢化が平均値である以上長生きできる人々の「ばらつき」は必然的に発生します。夫婦は必ずしも「とも白髪」になる迄添い遂げられるとは限りません。仲好しの仲間も同じです。結果的に、寿命のばらつきは生き残る高齢者の人間関係の貧困化をもたらします。自分が生き残った分だけ周りの親しい人々が先立ち、交流の輪が小さくなってしまふからです。大切な人々に先立たれた時、人は「心の支え」を失うこととなります。それゆえ、生き残ることは時に高齢者の「孤立」と「孤独」を意味することになるのです。人間関係の貧困化は情緒的貧困化と重なり、淋しさや不安をもたらします。「孤立」も「孤独」も心の支え、気持ちの拠り所となって来た人々を失うことの結果だからです。

高齢期こそ生涯学習の役割は社交の創造と人間関係の社会的「補充」に努めなければならないのです。高齢期になるとそれ迄人々を支えてきた

「血縁」、「地縁」、「職業（結社）の縁」など従来の人間関係を形成してきた伝統的な「縁」はほとんどその効力を失います。「血縁」を支えてきた家族も親戚も皆老いて行きます。家族の核家族化に加えて現代では子どもの親元就職も極めて難しくなりました。「スープの冷めない距離」に住むことすら難しくなるということです。

地域社会で一緒に過ごすことの多かった「地縁」の方々も同じように老いて行きます。あわせて急激な生活スタイルの都市化は従来の共同体的人間関係を衰退させます。定年後10年もすれば、「職場の縁」も薄くなる一方でしょう。

日本には欧米社会のように教会などを核とした日常の宗教活動が希薄です。それゆえ、一方で人々を繋ごうとする新興の宗教がつつぎと起りますが、他方では伝統的な縁に代わる「新しい縁」が重要になります。「新しい縁」とは「活動の縁」です。「学習の縁」、「ボランティアの縁」、「同好の縁」などを意味しています。志を同じくする縁ということで「志縁」と呼ばれています。これらこそ老後の人間交流を支える新しい縁；「生涯学習の縁」なのです。

### 2 「生きる力」の順序性

マズローの「欲求のハイラーキー」説に倣って、「生きる力」にはハイラーキー（順序性）があり、それぞれの段階の適応能力には優先順位があると指摘しました。人間の欲求が「生存」を前提とする以上、高齢期の生涯学習を論じるにも「生存」と「安全」が保証されていることは前提条件です。「生存」と「安全」のためには「人々の体力（肉体的

健康）—耐性（気力、意欲、精神の健康）—経済力（老後の財源）」などが不可欠の条件になります。これらの前提条件が確立された上で、次に、日々の社交と交流を通じた人間関係を確立することになります。人間関係の目的は人々の「帰属」や「愛情」の欲求を満たすことです。社交や交流はそのための手段であり、方法であり、目的になりま



す。「生存」や「安全」が第1段階とすれば、「帰属」や「愛情」は高齢期に満たすべき第2段階の条件になります。

精神的、経済的、社会的に自立していれば、一人になってもそれは「独立」と呼ばれます。しかし、生活の自立が達成できていても他者との交流が絶えて社会に取り残されれば、「独立」は「孤立」に転じ、やがて「孤独」に繋がってゆく恐れがあります。建築家の高橋氏は介護に「命の介護」と「文化的介護」の2種類があると指摘しています。「命の介護」とは文字どおり生きるための介護です。「生存」と「安全」の確保が目的であると言い換えてもいいでしょう。一方、「文化的介護」とはより良く生きるための介護を意味しています。換言すれば、「文化的介護」とは、高齢者を、高齢者が苛まれる孤立感、疎外感から解放する手だてを含んだ介護であると言うことができるでしょう。高齢者の介護は「さびしさ」との戦いが大事な仕事になります。社交のある文化的介護を、高橋氏は「さびしさ産業」と呼んでいます(\*1)。生涯学習や福祉プログラムには高齢者の孤立と孤独に付いての配慮が決定的に欠落しています。介護を企画する現役世代は交流も社交も巧まずして日常生活の要素になっています。それゆえ、企画者自身が「老い」の「孤立」や孤独を自らの危機として未だ感じる

ことができていないからでしょう。

従来、「さびしさ」は個人が乗り越えるべき私的な問題でありました。原理的に「人付き合い」は個人のプライバシーに属し、他者の介入を許しません。しかし、「生き残った者」が次々と親しい人々を失う高齢社会では、人々を孤立から守る「社交の創造」がプロの仕事になりつつあるのです。かつての「見合い結婚」に「仲人」が必要であったように、高齢期の社交や交流にも「仲人」が必要になって行くことでしょう。果して、生涯学習や福祉の担当者は、それぞれに課された仕事の中でどの程度「社交の創造」や交流支援の役割を自覚しているでしょうか。学校は子ども達に世代間交流の意味や実践を教えているでしょうか？いないでしょう！特に福祉の分野では生涯学習や交流支援の経験が希薄なため、余りにも「生存と安全」の問題だけが強調されます。そのことは「介護予防」の教室の名称や指導内容に明らかに反映されています。社交や交流が廻り廻って熟年の活力を引き出しているメカニズムに気付かないのは行政が教育と福祉の「縦割り」にこだわり、余りにも分業的に線引きして区分けしてきたからです。高齢社会では、高橋氏のいう「文化的介護」のために、福祉と生涯学習のドッキングが不可欠になるのはそのためです。

### 3 経験の共有と「同じ釜の飯」

心身が衰えた上にひとりぼっちになれば、到底、人はいきいきとは生きられません。多くの方が頑張ってきたのは誰かを守り、誰かのために役に立つことを願ったからです。その誰かを失い、人生の喜怒哀楽を分かち合うことが無くなった時、人々が生きる意欲を失うのは当然の結果でしょう。人々の心を支えるには「親しい他者」が必要です。社交が重要になるのは高齢期に失われる「親しい他者」を再発見し、確保するためです。家庭を営み、労働に従事している間は、人は、好むと好まざるに関わらず、社交の中にいます。若い時の生活や

仕事は交流なしには成り立ちません。社交とは、対人関係を維持することだからです。対人関係は、特に労働や活動の中で育まれます。中根千枝氏が夙に指摘した通り日本人の交流は「経験の共有」によって生まれ、「同じ釜の飯」を食べた時間の長さによって付き合いも深まる傾向にあります。労働にせよ、活動にせよ、経験の共有に際して、私たちは時に、気を使い、心を働かせ、精神を躍動させ、時にお互いの我慢を要求します。社交は人間関係を起点とした活動です。

### 4 「やり甲斐」と「居甲斐」

仕事や趣味や社会貢献は「やり甲斐」の対象ですが、人間関係は自分がそこにいることが人々

に必要とされるという点で「存在する甲斐」すなわち「居甲斐」と呼んでいいでしょう。「やり甲斐」も

「居甲斐」も活動の中で自然に絡み合って「生き甲斐」を形成することが多いので、通常は特別に区分する必要はありません。ところが労働の季節が終り、日常の活動そのものが縮小して行く高齢期にあつては、生活を通して人間関係を自然に補充することは困難になって行きます。公民館もデイケアセンターも活動プログラムの提供は意識的に行ってきましたが、社交や交流の仲介をどの程度意識化したでしょうか？社交の目的は「居甲斐」を実感することです。「居甲斐」は帰属や愛情の欲求が満たされた時初めて実感できるものです。高齢期のグループ・サークル活動が重要になる所以です。要するに、人は社交によって社会における自分の

位置を確認するのです。社交によって孤独や孤立を免れ、新たな活動に挑戦する意欲や気力を取り戻すのです。社交や交流を仲介・支援することが高齢期の「生きる力」の支援になるのはそのためです。

人間にとっては、労働（活動）と社交を同時に進行させることは心身の機能を使い続けることを意味します。定年によって労働から離れた熟年にとっては活動が唯一残された社会との接点です。労働から活動へのスムーズな移行がどれほど重要であるか明らかでしょう。活動を失うことは社会との接点を失うことを意味しているのです。

## 5 交流は活動の副産物

生涯学習の意義は学びと交流をほとんど同時に生み出すことにあります。しかし、交流を深化させて行くのは活動です。「経験の共有」の時間が付き合いを深めて行くことは疑いありません。社交の創造に「生涯学習の縁」が重要になるのもそのためです。労働にも労働以外の活動にも人々の出会いを他律的、強制的に要求する場面と機能を内蔵しているからです。人々の協力を必要とする活動には他律的に交流を強制する機能が含まれています。協力しなければ活動が成り立たないということは当該活動が人間の交流を前提にしているのです。活動と社交が熟年期の活力を生み出し、ボケを防ぎ、心身の衰耗を先に延ばすのです。程々の「負荷」をかけて感覚体を働かせることが「生きる力」を保持することに繋がっているのです。「負荷」の程度については高齢期になればなるほど個体差が大きくなるので一律の基準を断定的にいうことは極めて危険でしょう。しかし、向老期の個人的実感でいえば、「現有能力の一割程度」が

程々の「負荷」にあたるでしょう。「10%ほどがんばって努力する」ということが「生きる力」の処方です。社交の創造は高齢社会の活力を維持する重要な処方の一翼です。だからこそ「社交」の促進にプロの参加が必要になるのです。公民館の職員の任命にあたって、現在の行政は、定年の危機、「労働」から「活動」への移行の失敗、高齢化による心身の衰弱の悲惨、「社交」と「交流」の貧困化の意味についての研修はしていないのでしょうか？定年後、活動を停止してしまうことが如何に危険であるか、人間関係の輪がどんどん小さくなって行くことがどんなに危険なことか、果たして高齢者行政は分かっているだろうか？活動と社交によって防衛することを忘れた高齢者は無為と孤独に少しずつ喰い殺されて行くのだと思う。人間関係の貧困化がもたらす衝撃を分かっている役所の職員をほとんど無意図的に生涯学習行政にたらい廻しにする愚行にまだ地方のトップは気付いていないのではなかろうか。

( \* 1 ) 高橋英興、老後をさびしく耐えますか、ともに楽しく生きますか、風土社、1998年、pp.44～45

## 6 人生は「活動」で出来ている一生涯学習の役割

### (1) 新しい「縁」の創造

人生は「活動」で出来ている、と喝破したのはスイスの老年学者ポール・トゥールニエでした。生

活の糧を稼ぐことがあまりにも大変で、重要であったが故に、我々はややもすると「労働」が主役であ

るかのように錯覚しがちでした。もちろん、現在でも平均寿命が短く、経済発展が滞っている国では、実態として人生は「労働」で出来ていることでしょう。しかし、日本の場合には、トゥールニエの指摘を受けてみれば、労働は「生産活動」であり、「サービス活動」であり、活動の特別な形態に過ぎないことに気付かされます。何よりも人生80年時代に入れた今、定年後の労働の空白、残された時間は労働以外の「活動」によって埋めなければならないことは誰の目にも明らかになったのです。ところが「労働」から「活動」へのスムーズな移行は言葉で言うほど簡単ではないことを見落としがちなのです。周りを見渡せば、これ迄の「労働」が厳しい義務であった分だけ、労働の反対語は「無為」となり、「安逸」となりがちです。その故でしょう。労働の終りが活動の停止になってしまう人は数多くいるのです。しかし、人間の活力：心身の機能を維持してきた要因は労働という活動の特別形態にあったのです。仕事を通して人は「頭を使い」、「身体を使い」、「気を使って」機能を維持し続けてきたのです。労働から解放されて人々がその持てる機能を使わなくなれば、脳味噌であれ、筋肉であれ、おそらくは内臓であれ、その働きは一気に衰えます。労働の終りが活動の停止になった時、その後の人生にとって如何に危険であるか明らかでしょう。活動の停止は急速な機能の衰退と下降を意味するからです。

一人になったあともお元気に活動を続ける高齢者は、定年後の活動に心身を使い続けることによって自らの活力を維持し、活動を通して絶えず人間関係のネットワークを補充しているのです。「活動」の「やり甲斐」と「社交」が生み出す存在の実感；「居甲斐」が熟年のお元気を支えていると断

言してまちがいありません。しかも、上記の通り、熟年の活動も人間関係もその多くは、血縁、地縁に基づくものではありません。もちろん、高齢期は定年をとくに過ぎている以上、職縁に基づくものでもありません。新しい人間関係の大半は「生涯学習の縁」であり、「ボランティアの縁」から始まっています。それらは志を同じくする人々の「志縁」と呼んでもいいでしょう。学習をともしれば「学縁」が始まり、趣味や楽しみを共有できれば「同好の縁」が広がります。これらの「縁」は活動をすすめる役割を負っていますが、ほぼ同等の重みで「社交」を維持する機能を果たすことになるのです。そして「社交」こそが心の拠り所として新しい人間関係を開拓して、老後の孤立から人々を守ることになるのです。それゆえ活動は社交を通して新しい人間関係を生み出し、その仲間が反応しあって次の新しい活動に進化して行くのです。かくして活動と交流は相互に影響しあって熟年の生涯を豊かに保って行くのです。生涯学習は沢山のの人々を活動に招待する義務と責任を負っています。これまでに三十余年に渡って行政が主導した生涯学習の時代は多くの日本人を自発的な創造者に変えました。しかし、全体を見ればまだまだその成果が行き渡っていないことは明らかです。特に、人々の労働が終焉した高齢期には労働以外の活動を通してしか他者と巡り会う機会はないのです。行政主導の生涯学習の振興・推進策は高齢期の人々を重点対象として展開すべきだと思います。高齢期の「活動」のやり甲斐の創造はもちろん重要ですが、活動を新しい「縁」に繋げて行く仲介機能こそが高齢社会の熟年の孤立を回避するもう一つの大事な役割なのです。

## (2) 「社交」舞台の創造— 「心の支え」を得る—「居甲斐」を見付ける

「心の支え」を得るとは信頼できる人々が存在することを意味しています。また「居甲斐」を見つければ周りの人々から自分が必要とされ、自分が愛されているという実感を持てることを意味しています。要するに、「心の支え」とはあなたが愛している人々の存在であり、「居甲斐」の実感とはあなたを必要とする人々の存在です。「あなたがいて良かった」と思える時私たちは「心の支え」を得られます。同じように、「あなたがいてよかった」と言

ってくれる人々がいて私たちは「居甲斐」を実感します。「心の支え」と「居甲斐」はお互いに支えあう双方向の人間関係から生まれてきます。それゆえ、通常は経験の共有が不可欠であり、活動をともにすることが双方向の人間関係を発展させる条件になります。生涯学習が対等の人間関係を重視するのはお互いに支えあう双方向の目的を同時進行的に達成する上で原理的に重要だからなのです。

世の中にはやむを得ない事情によって「一方

的な奉仕」や「一方的な依存」もたくさんあります。しかし、生涯学習の縁に連なる人々の人間関係は対等であり、双方向的であることに最大の特徴があります。そこには利害得失の要素や人間関係が相対的に希薄です。生涯学習は活動そのものの意義が重要であります。活動の過程が対等で互恵的であるので、人々はより容易に双方向的な人間関係を発展させ易いと思われます。お互いの貢献を認めあうことによって、人々は「心の支え」も、そこに「居甲斐」も実感できるのです。ややもすると生涯学習も、ボランティア活動も、活動の「中身と効果」が重視され、「やり甲斐」が目指されますが、あらゆる社会的活動には副産物としての人間関係が含まれています。高齢期の生涯学習の支援に際しては、行為の中身や方法に加えてその過程で形成される人間関係にもう少し意識的な仲介の機能を持たせることが重要であると思われます。あらゆる社会的活動の副産物は人間関係であり、社交であるということは原理的に正しくてもすべての人が理屈通りに交流の恩恵を被るとは限らないからです。「心の支え」も「居甲斐」も人々の交流と社交によって進化して行くものですが、あらゆる活動に得手、不得手があるように人間関係の形成にも得手不得手があると想定すれば、活動の企画者による仲介支援は極めて重要な意味をもちうるのです。活動の「やり甲斐」と人間関係の「居甲斐」と「心の支え」があいまって人々の「生

き甲斐」を創造するのです。

時に、人々が心身の衰耗の結果、具体的にほとんどの活動が出来なくなったあとも、過去に形成した人間関係が孤立の回避になっていけば人は己を支えることができるのです。愛し愛されてお互いを必要とすることが確認できた時「居甲斐」は人生の鍵になります。「居甲斐」こそが生きる力を支える最後の拠り所になります。もちろん、横沢氏の言うように”人と会うのは力仕事”(\*2)ですから誰かの助けが重要になるのです。人と会うのは疲れることなのです。だからこそ社交にはトレーニングが必要になると横沢氏は指摘しています。おそらく人は誰でも心の支えを見出したい、自分の居る甲斐を見出したいと願って、最終的に人との出会いを求めていると思います。一人ではほとんど何もできず、一人で生きるよりは支えあって生きる方が楽しいからです。社交を促進する仲介機能が大事なものは、人付き合いに必要な「力仕事」を応援して、楽にすることが不可欠だからです。熟年者に対する生涯学習担当者の主要任務は交流の「応援」と「仲介」機能であるのはそのためです。それゆえ、高齢社会の公民館職員や社会教育主事の基本資質は愛嬌と親切を基本とした対人交流能力であると言っても過言ではないでしょう。特に、高齢者の生涯学習プログラムに愛嬌と親切心のない社会教育職員を配置してはならないのです。

(\*2) 横沢 彪、それでも「人と会おう!」、新講社、2001年、p.28

### (3) 「ふれあい」プログラムだけで人を結ぶことは難しい

人間の出会いをパーティーや集団見合いのような出会いのプログラムだけで演出することはとても難しいことです。人々は経験を共有する活動の過程を共にくぐってはいないからです。同じように「居甲斐」もまた出会いを目的とした単独のプログラムでは作り出すことが難しいのです。人に出会っただけで自分が必要とされる場面に会えると考える方が無理というものでしょう。日本文化に限らず人間関係の形成は「同じ釜の飯」に象徴される経験の共有、活動への共同参加が促進するものだからです。交流の促進は常に能動的な活動の副産物として生じるものだからです。「ふれあい」プログラムの大半が愚かなのは、子どもの場

合も大人の場合もパーティーやコンパで「ふれあい」人間関係が生まれると錯覚していることです。「お見合い」は日本の伝統文化が発明した人間関係の出発点ですが、「お見合い」が機能したのは、自由な交際が保障されず、身分制度や身分意識に伴う制約があまりにも厳しかったからでしょう。このような文化的・制度的強制力の背景が存在したからこそ事前に設定された「お見合い」で人間関係を作って行くしか選択肢がなかったということです。だから制度の強制力が消滅した現在では、表面的な紹介や出会いのプログラムが人々を交流へ導くことは稀であることは当然の結果なのです。まして、自分が他者に必要とされ、己の存在感を

実感できるほどの「居甲斐」に導ける筈はないのです。

特に、「縦社会」(中根千枝)と総括される日本文化において、単なる「ふれあい」が社交や居甲斐に繋がることは少ないのです。夙に、中根氏が指摘したように、日本人の交流の深化には活動とともにする時間が必要です。仲間との連帯は「経験の共有」によって形成され、深化されて行きます。「ふれあいパーティー」も確かに活動の一種ではありますが、心身の機能の動員のレベルがいかにも軽いのです。物事を成就するための活動と「ふれあいパーティー」では双方に必要とされる心身のエネルギーの量が大きく異なるのです。要するに、個人にかかる活動の「負荷」が違うのです。活動の「負荷」が高いほどわれわれは全身全霊を打ち込んで対処しなければなりません。「パーティー仲間」の連帯が「戦友」の絆にかなわないのは、「同じ釜の飯を喰った」時の「負荷」の大きさの違いなのです。苦労をともにした仲間が強いのは、共有する「経験」の質が連帯の堅さ、絆の強さに比例しているからです。

高齢期の生きる力を保持しようとするれば、心身の機能に負荷をかけ続けなければなりません。感覚体の機能は使わなければ衰退するからです。高齢期の活動が生きる力の保持・存続するのに役立つのはそのためです。さらに、「苦労をともに

した仲間」の絆が強いのは、「負荷の高い」経験を共有しているからです。だとすれば、己を支える居甲斐を探す場合も原理は同じです。楽しいパーティーの仲間は「軽い」のです。“戦友”の絆は「堅い」のです。軽い仲間は気晴らしにはなっても、「心の支え」にはなりません。それゆえ、確固たる居甲斐を探すのであれば、人はそれぞれの「戦場」に赴かなければならないのです。ひとびとがある意味で難儀なボランティア活動の中から大なる生き甲斐や新しい“戦友”を発見するのは、そこにある種の「戦場」だからなのです。同志は「負荷」に耐えてともに難問を切り抜けた「経験」を共有しているのです。その意味で「活動」こそが居甲斐の源泉であり、「負荷」の高い活動こそ優れた仲間巡りに巡り会う「戦場」を提供するのです。多少の困難に耐えて「同志」を探すことが、心の支えを発見する必要条件なのです。老いて「楽」なことだけを求め、社会的活動から遠ざかれば、心身の機能が急降下するに留まりません。孤立と孤独を防ぐべき「居甲斐」に出会うこともなくなるのです。社交は活動の副産物であることを再確認しなければなりません。しかも、「負荷」の高い活動こそ交流を深化させるのです。楽で、楽しいことだけを求める生涯学習の「ふれあい」論の愚はこの原理が分かっていないのです。

## 第66回生涯学習フォーラム

日時：平成18年4月15日(土)15時～17時、  
研究会終了後、センターレストラン「そよかせ」にて夕食会を予定しています。どうぞご参加ください。  
場所：福岡県立社会教育総合センター  
事例発表：子どもの社会参画-準備過程と実践の成果  
-佐賀県多久市の子ども観光ガイド-(仮:発表者交渉中)  
論文発表：2007年問題3:熟年の危機と生涯学習(三浦清一郎)  
会場その他準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。(担当:恵良)  
092-947-3511まで。

# 評 価 の 核 心

今回の報告は行政評価が基本テーマであった。今回の発表は2件。一つは福岡県穂波町教育委員会の五年に渡る実践の総括である。報告・分析は森本精造教育長と同町楽市小学校の川原田寿史校長にお願いした。他の一つは福岡県立社会教育総合センターの評価と展望である。就任1年の過程を展望し、次年度の企画に繋げた施設評価を菊川律子所長にお願いした。

## ◆ 1 ◆ 評価の核心―「集中と選択」は「集中と選択」に成り得たか？ ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

センターの事業評価結果の公開はお見事であった。分析も論理的であった。向上と改善の結果も報告の通りであろう。しかし、筆者の関心はそこにはない。

人も施設も金と力が衰えてくれば突破口は「集中と選択」を断行するしかない。この数年筆者は自らの身の回りのあらゆる人間関係と暮らしの要素に「集中と選択」の決断を下してきた。しかし、果して「集中と選択」は本人のスローガン通りに「集中と選択」に成り得ているか？過去を捨てることは決して簡単ではない。これが報告を聞くにあたって筆者の興味の核心であった。

己を取り巻く条件が先細りし、金も力も時間すらも無くなって行く状況下では、先細りして行く己の戦力を限られた目標に集中する以外物事は達成できない。したがって、「選択」しなかったものは目をつぶって切り捨てるしかない。結果的に「集中と選択」は過去との訣別を意味している。訣別は義理を欠き、大事にしてきたものを切り捨て、相手関係者の心情を害することを意味する。それでもやるか！？それでもやらなければいずれは当事者自身が空中分解する。基本原理は先年の金融機関における不良債権処理と同じである。

我が人生の諸々の活動が「不良債権」であったとは言わないが、放置すれば自分自身の衰退とともに「不良債権」に転落することは明らかであった。

筆者も自分のやった「集中と選択」にそれほどの自信はないが、先細りする能力ですべてを抱えて行くことはできないことだけは自明である。

公民館に代表される生涯学習施設も生涯学習施策も財政難、人事難の状況下で「集中と選択」の断行に失敗したのである。失敗したから財政難と人事難が一層の悪循環を辿るのである。多額の人件費と運営費を投じた多くの公民館はすでに不要である。多くの生涯学習センターも不要である。要するにシステムも事業も時代遅れで制度疲労を起こしているのである。センターもこの轍を踏んでいないか！？暴論に聞こえるであろうがこの時期に至って、一般県民のための中途半端なプログラムなどは不要である。また自立が可能な県民に対する支援も基本的にやる必要はない。これまでのセンタープログラムを継続しても社会に衝撃は与えず、世間が未来を垣間見ることもない。市町村が参考とすべきモデルも生まれない。「集中と選択」の対象は「未来の必要」であり、自立の叶わない子どもと年寄りと働く女性への支援である。「お上」の風土において県が今も市町村に対して「上位」に位置しているとすればその役割はなにか？「集中と選択」の方向は生涯学習の実践的未来モデルを提示することしかない。何人かの質問者の意見と提案はそのことを聞いたがっているとお見受けした。

## ◆ 2 ◆ 教育の革新は学校の革新であり、生涯学習の革新もまた学校の革新にある ◆◆

教育の革新は学校の革新であり、生涯学習の革新もまた学校の革新にある。穂波町の教育改革の結論はここにあると理解した。報告者に校長

先生が登場した一事をもって「なんと羨ましいことか！」と「子育て支援」の拠点の確保で苦勞している豊津町の担当者が述懐したのが印象的であっ

た。それくらい学校はあらゆる生涯学習施策から遠いのである。穂波町は学校を改革しつつ、生涯学習施策を改革し、生涯学習施策を改革しつつ、学校を改革しようとした。その成果がようやく形になり始めたところである。学校選択制の断行から始まった改革は、各学校の教育マニフェストの作成に結実し、住民のための学校として動き出す下地を作った。そこから従来の社会教育実践の成果を活かし、学校施設を活用した「学校週5日制」対応事業：「生き生きサタデースクール」が誕生するのである。

学校週5日制の空白を埋めなければならない、とは誰もが言う。しかし、誰が継続的、効果的にその空白を埋め得たであろうか！？上記で「未来モデル」と言ったのはこの種の事業を意味しているのである。「サタデースクール」はやがて「穂波子

ども塾」に進化し、年間300日もの子育て支援実践に昇華する。同様の発想で始められた「熟年学び塾」は学校で学ぶ高齢者の活動が「子ども塾」と繋がり、学校と繋がり、ゆるやかに学校教職員の意識も変革して行く。すべての事業は学校を連結の「環」として子育て支援システムや学校支援システムとして結実して行くのである。結果的に学校はコミュニティ・スクールとして機能し始め、学校安全会の保険がカバーする子どもの安全のための「学校宣言」に収斂して行くのである。当然、このような開かれた学校運営は開かれた教職員の意識に繋がって本来の学校教育そのものを革新して行くであろうことは疑いない。これら一つ一つの実践もまた上質の「未来モデル」であることは言を待たない。



# MESSAGE TO AND FROM

お便りありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがありましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

## 胸騒ぎの春

### あゆむあゆむもの思う春のゆくへかな(蕪村)

「郷愁の詩人と謝蕪村」を書いた萩原朔太郎が最も愛した句の一つである。春は万物が目覚めて山野に彩りが戻りすべてが眩しく輝いているのにどこか胸の一点が重く不安がたゆとうのはなぜだろうか！？再び帰らない過去や予見不可能な未来に分けもなく思いを揺さぶられるのは何故だろうか？朝の散歩のカイザーの森には辛夷が咲

き、れんぎょうが整列し、雪やなぎが風に揺れ、椿と桜が花当番を交替しようとしている。池の水も温み、木々は小鳥の声に溢れ、光は輝くばかりなのに、物憂い胸騒ぎを抱えてうつむいて歩いている自分に気付く。丘の頂きから見えた玄海の渚をたずねたがそこでも三好達治の歌を思い出し、思わず旅の終りを思った。

### 春の岬旅の終りのかもめどり浮きつつ遠くなりけるかな(達治)

合併を目前に控えた友人の穂波町の教育長から最後のメールが届いた。去就は政治の判断に任せてしばらくは晴耕雨読の暮らしを始めるとあった。荷物が運びだされてガラガラになった執務室の寂寥が想像できる。長い間ごろうさまでしたと書き送るしか自分にはすべがない。同じく「豊津寺子屋」の前の担当者からは、忙殺された寺子屋の立ち上げ時期には一人の部下もなく、予算も事

業計画すらもない合併後の今になって部下が配置されるとはなんということでしょうか、とメールが届いた。「寺子屋」の子どもの声から離れて、見えない未来と対峙している彼女の不安が想像できる。新しい事業計画はきっとこんなふうになると思うよ、とにわか拵えの事業展開試案を書いて送った。

春は人それぞれに先の見えない新しい生活に踏み出す。胸騒ぎのもとはその辺りにあるのであ

ろう。北九州の南さんから「自分らしく生きる」、「老いてこそ人生」のテーマで講演の依頼をいただいた。こちらが教えてもらいたいものだ！、と思ったことであった。それでも容赦なく時は過ぎて行く。「風の便り」の締切りも来る。締切りがなかったら我が人生のスケジュールは崩壊するだろう、とつくづく思う。

気を取り直して新しい年度に立ち向かう。高知の山中さん、金沢の鯉野さん、天草の池田さん、那覇の大城さんお便りありがとうございました。佐賀の紫園さん、山口の赤田さん、新企画の成功を祈ります。お陰さまで気合いを入れ直して仕事にかかることができます。5月の25周年大会でお目にかかれるといいですね。

### 過分の郵送料、お心使いありがとうございました。

- ★ 熊本県上天草市 池田光利 様
- ★ 山口県下関市 田中隆子 様
- ★ 石川県金沢市 鯉野利美江 様

- ★ 島根県出雲市 立花陽子 様
- ★ 福岡県久留米市 弥永親一 様
- ★ 沖縄県那覇市 大城節子 様

### 編集後記： 予測不能か？準備不十分か？

人生には間違いなく「運」がある。「運」に備えて準備をしておかないとひどい目に合うことは分かっているようで分かっていない。最近、筆者の旅は新幹線が多い。本が読めて、時々デッキで体操もできる。年を取ると同じ姿勢のまま長い時間を過ごすことは禁物である。今回は指定のA席であった。三列並びの窓際である。塩野七生さんの地中海ものはすこぶるおもしろい。列車に揺られて物語の余韻を反芻していた時岡山から乗車した老夫婦が私の隣に坐った。手洗いに行っておきたかったが本が面白すぎてついつい立ちそびれた。昼時だったのでお二人は横で弁当を広げた。私は遅いランチを食べたので弁当はもっとあとでいい。やむを得ず「レバントの海戦」の先を読み進むことにした。物語の半分を読み終わる頃に隣の弁当が終り、ふたりは両手に大きく新聞を広げてそれぞれに読み始めた。こんどもタイミングを逸して立ちそびれ、私は窓際に小さくなった。15分もすると弁当の後、お腹に血液が集まったのであろう。お二人は椅子の背もたれを最大限に倒して前の座席に足をつっ張ってあつというまに鼾になった。今度は絶対に立てない。ふたりは新横浜まで高いびきで眠り通した。哀しいことだが、天晴れなものである。

翌日の帰路は更に悲惨であった。帰りも3人がけの窓際A席であった。名古屋までは若い男性とブックエンドのように端と端に坐った。往路の轍は踏むまいと手洗いを済ませ、飲み物を買って座席に落ち着いた。「レバントの海戦」はとっくに読み終わって、日経の隅々まで読み始めた。やれやれと思う間もなく、若者は名古屋で降り、そのあとは別々に女性が乗って来た。ふたりとも大きな荷物を抱えて来て座席前には巨大なスーツケースをおいている。ふたりに通路に出てもらわない限り窓際の席を立つことはできない。悪い予感がした。真ん中の席の女性は夫婦もので御主人は前の座席に坐った。悪いことに今回も昼時にかかった。夫婦ものは前と後ろで弁当を交換し、飲み物を交換し、果てはかかって来た携帯電話まで交換する。昼飯のあとは微動だにせず眠りに入った。深い鼾が眠りの深さを象徴している。ふたりの女性は博多まで行った。以後JTBの担当者には三列の窓席は取らないように頼んでいる。今回は膀胱炎にならないですんだことを幸いと思うしかない。このようにしてエコノミークラス症候群は起るのであろう。次回は「豊津寺子屋」の皆さんと文科省の表彰式に向かう。今度の新幹線は身の安全を確保している。

『編集事務局連絡先』 (代表)三浦清一郎：〒811-4177 宗像市桜美台29-2

TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail [sdmiura@fj8.so-net.ne.jp](mailto:sdmiura@fj8.so-net.ne.jp)

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。2006年4月号からご希望の方は、『編集事務局連絡先』まで、90円切手9枚、または現金810円をお送りください。

『オンライン「風の便り」<http://www.anotherway.jp/tayori/>』